

第7章 高等学校における基礎的・汎用的能力と生徒の学習意欲

1. 「基礎的・汎用的能力」と「学習意欲」の関係を見る必要性

キャリア教育に求められている課題の一つは、学校から社会・職業への円滑な移行であり、具体的には無業者や早期離職等の状況改善である。また、個人に対する実践上の課題は、社会的・職業的自立に必要な基盤となる能力の個人レベルでの育成である。この基盤能力は、各種の調査報告書・審議会答申で例示されている^(注1)。例えば、社会的・職業的自立と社会・職業への円滑な移行に必要な力の要素として、「基礎的・汎用的能力」が挙げられている^(注2)。

そして、近年はこれらの課題に加えて、キャリア教育は「学習意欲の向上」及び「学習習慣の確立」に寄与するものとして政策的にも期待されている^(注3)。

こうした観点に立ち、近年の幾つかの調査研究においても、キャリア教育と「学習意欲」の関連について分析がなされている。例えば、国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センターは学校並びに教員を対象とした調査結果から、充実した計画に基づいてキャリア教育を実践している学校ほど「学習意欲」が向上する傾向があることを示している^(注4)。しかしながら、学習意欲を抱く主体である生徒を対象にした調査を分析した結果に基づいたものではなく、生徒に直接回答を求めたデータでも同様の結果が得られるのか、分析が待たれている。

そこで、本章においては「高等学校普通科におけるキャリア教育の実践と生徒の変容の相関関係に関する調査研究」(以下、「変容調査」)のうち、生徒調査データを用いて、キャリア教育を通じて育成が目指されている「基礎的・汎用的能力」と「学習意欲」の関連について分析を行う^(注5)。

2. 「学習意欲」に関する調査項目

「変容調査」では、高校生の「学習意欲」に関する項目として、「意欲・態度」「学ぶことについての意識・意味付け」についての質問がある。例えば、「授業を熱心に受けている」「家での学習に積極的に取り組んでいる」「これからもっとたくさんのことを学びたいと思う」などがある。こうした質問項目に対して四つの選択肢(「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」)の中から生徒が回答する形式であった。

こうした質問項目の中で、「家での学習に積極的に取り組んでいる」について見ると、「あてはまる」「ややあてはまる」と肯定的に回答する割合が、他項目に比較して最も低いことが示されている(図1・図2)。とりわけ、2年生前半の時期の肯定的回答率が最も低く、「あてはまる」が8.5%、「ややあてはまる」が34.7%であった。この2年生前半の時期は、いわゆる「中だるみ」と一般的に言われる時期であり、「家での学習に積極的に取り組んでいる」生徒は半数以下であることから、「学習意欲」が行動に表れていない時期と考えられる。

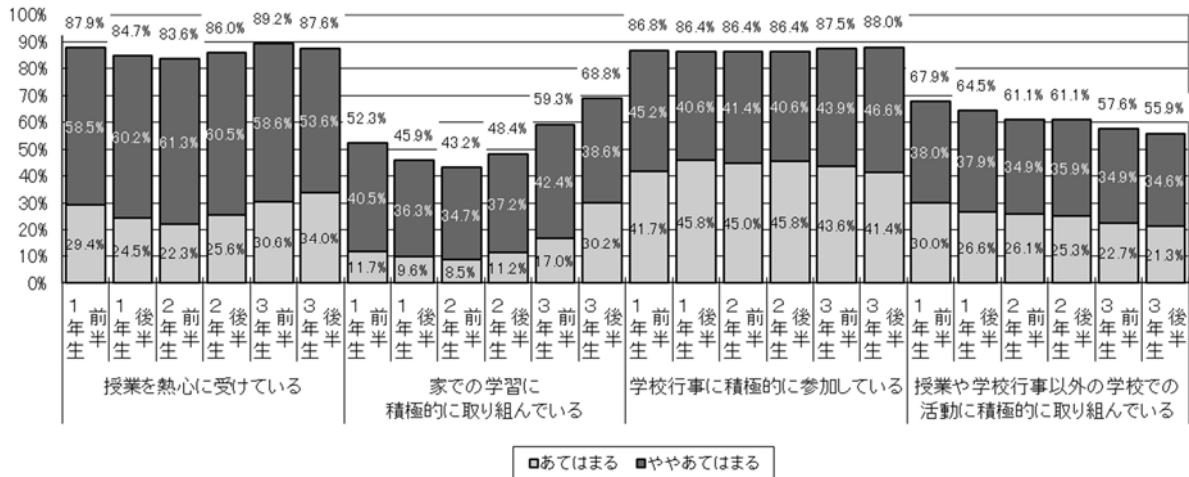


図1 「意欲・態度」に関する設問の集計結果

(出典：『変容調査報告書』9ページ)

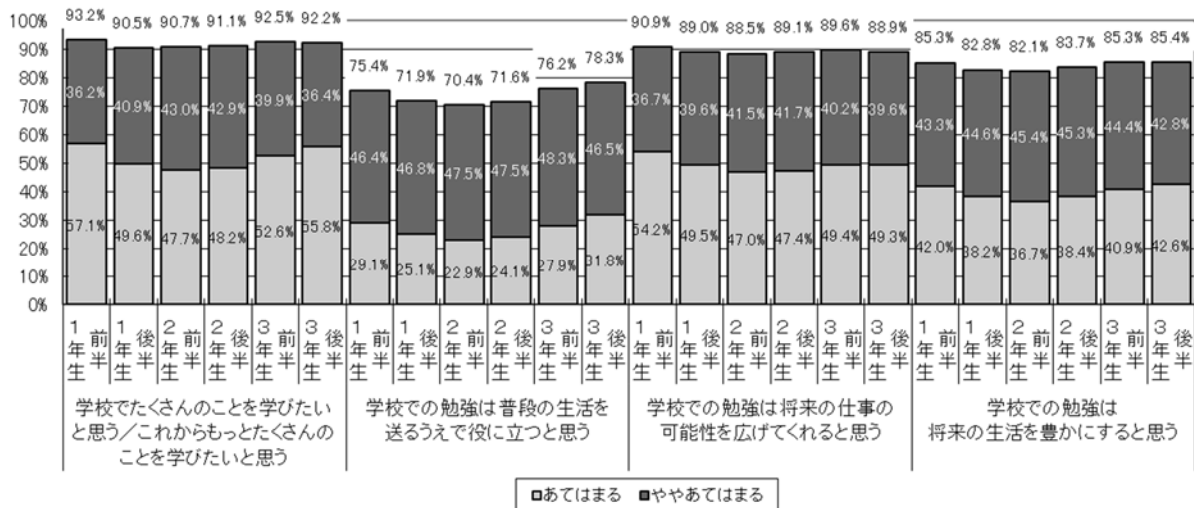


図2 「学ぶことについての意識・意味付け」に関する設問の集計結果

(出典：『変容調査報告書』10ページ)

3. 「基礎的・汎用的能力」の自己評価と「学習意欲」の行動側面の関連

次に、キャリア教育を通じて育成が目指されている「基礎的・汎用的能力」と「学習意欲」の関連について検討したところ、「基礎的・汎用的能力」の自己評価がより高い群ほど、「家での学習を積極的に取り組んでいる」ことがわかった(図3～図6)(注6)。

具体的には、次の手順で結果を得た。「基礎的・汎用的能力」については四つの下位領域(①「人間関係形成・社会形成能力」、②「自己理解・自己管理能力」、③「課題対応能力」、④「キャリアプランニング能力」)があるとされている(注7)。今回の分析に用いた「変容調査」では、この四つの領域につき6項目ずつ計24項目について、生徒が4段階で自己評価する形式で回答を得ている(「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」)。

本章の分析では、四つの各領域自己評価得点の合計点(24点満点)を基にして、当該能力の自己評価「低群」「中群」「高群」の3群に分類した。なお、この3群の人数は、ほぼ

均等になるように分けた。そして、この三つの群の間に「学習意欲」に差異が見られるのかについてクロス集計を行った（図3～図6）。ここでの「学習意欲」には、「家での学習を積極的に取り組んでいる」という学習行動側面についての質問項目を用いた。分析の結果、「基礎的・汎用的能力」の四つの下位領域全てにおいて、自己評価が「より高い群」（低群より中群，中群より高群）ほど、「家での学習を積極的に取り組んでいる」という項目に「あてはまる」「ややあてはまる」と肯定的に答える傾向があった。

各能力別に見ると、「人間関係形成・社会形成能力」（図3）においては、1年生前半～3年生後半で「家での学習を積極的に取り組んでいる」ことへの肯定的回答（「あてはまる」と「ややあてはまる」の合計）の割合に約20～28ポイントの違いが見られた。次に、「自己理解・自己管理能力」（図4）においては、1年生前半～3年生後半で「家での学習を積極的に取り組んでいる」ことへの肯定的回答の割合に27～39ポイントの違いが見られた。

「課題対応能力」（図5）においては、1年生前半～3年生後半で「家での学習を積極的に取り組んでいる」ことへの肯定的回答の割合に21～37ポイントの違いが見られた。「キャリアプランニング能力」（図6）においては、1年生前半～3年生後半で「家での学習を積極的に取り組んでいる」ことへの肯定的回答の割合に23～38ポイントの違いが見られた。

また、2年生前半の時期が最も「学習意欲」が低下する時期（第7章2節（図1）参照）であったことを踏まえて、この時期における「あてはまる」の割合に着目すると、「人間関係形成・社会形成能力」（図3）では高群が18.6%，低群が2.6%であった。「自己理解・自己管理能力」（図4）では高群が21.6%，低群が2.0%であった。「課題対応能力」（図5）では高群が21.1%，低群が2.1%であった。「キャリアプランニング能力」（図6）では高群が20.1%，低群が2.3%であった。このように2年生前半においては、「基礎的・汎用的能力」に対する自己評価が高い生徒は低い生徒よりも8～10倍程度「あてはまる」と答える傾向にあった。

この結果から、「基礎的・汎用的能力」に対する自己評価が高い生徒ほど、学習意欲が高い（「家での学習を積極的に取り組んでいる」）ことが指摘できる。

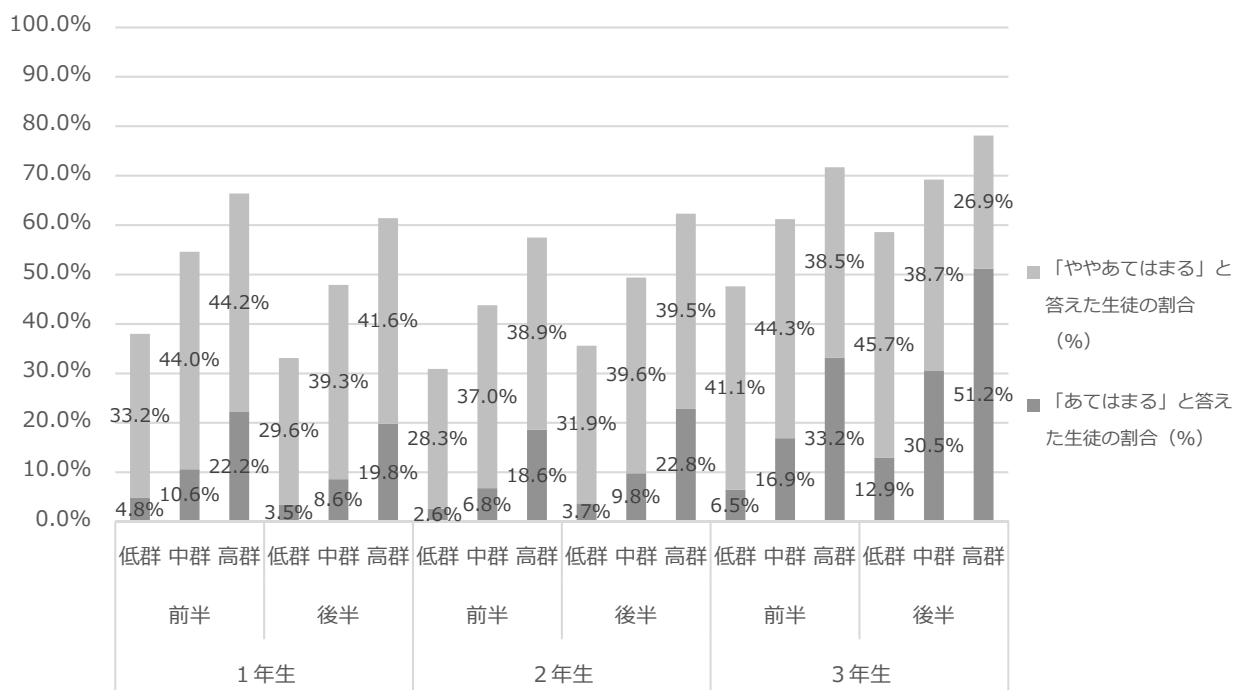


図3 「人間関係形成・社会形成能力」に対する自己評価得点群別の「家での学習を積極的に取り組んでいる」割合 (%)

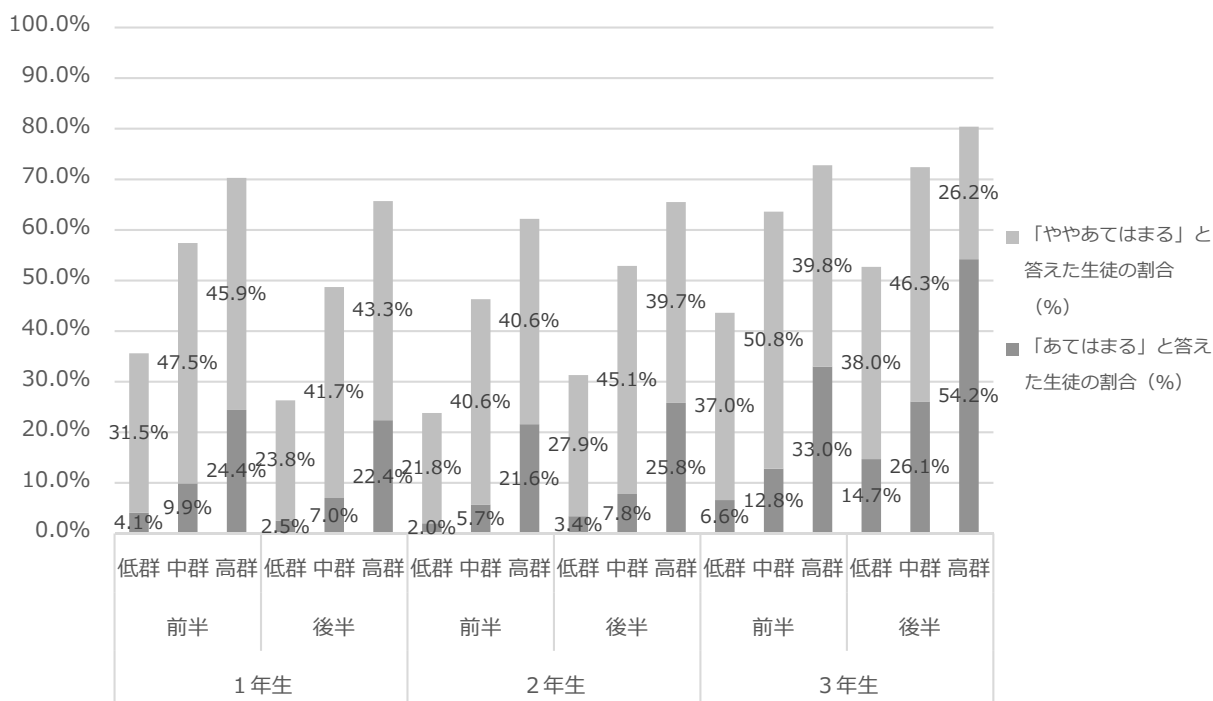


図4 「自己理解・自己管理能力」に対する自己評価得点群別の「家での学習を積極的に取り組んでいる」割合 (%)

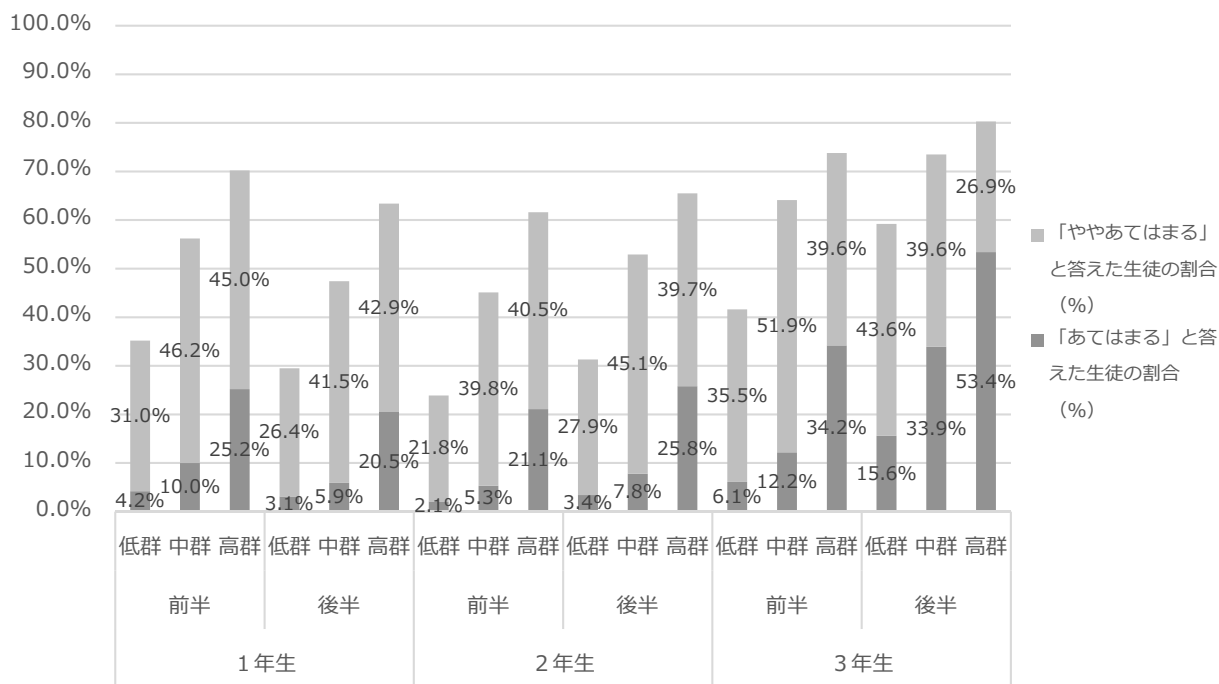


図5 「課題対応能力」に対する自己評価得点群別の「家での学習を積極的に取り組んでいる」割合 (%)

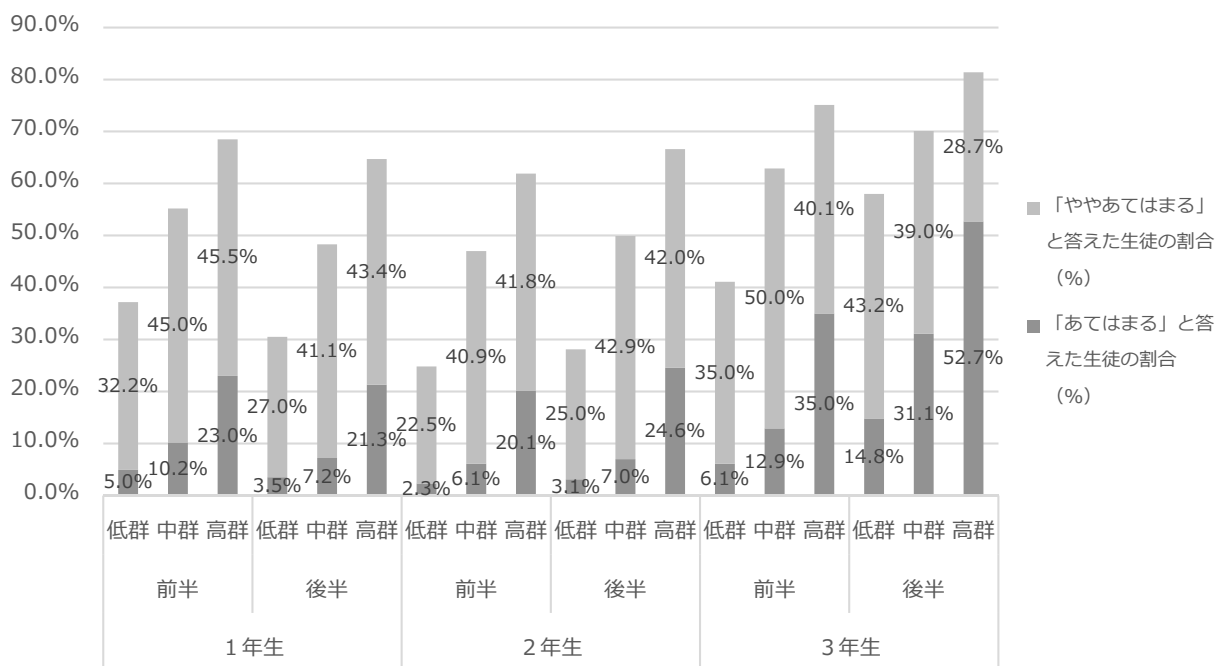


図6 「キャリアプランニング能力」に対する自己評価得点群別の「家での学習を積極的に取り組んでいる」割合 (%)

4. 「基礎的・汎用的能力」の個別項目と「学習意欲」の関連

次に、「基礎的・汎用的能力」を構成する個別の質問項目と「学習意欲」（「家での学習を積極的に取り組んでいる」）との相関を求めた。結果の詳細は、参考資料（付表7-1）に示した。

総じて、「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の中に、「学習意欲」（「家での学習を積極的に取り組んでいる」）と比較的強い関連を示す項目が含まれていた。具体的には、以下の項目が「家での学習に積極的に取り組んでいる」と比較的強い関連があった。

特に「キャリアプランニング能力」に含まれる「勉強をすることの意味について自分なりの考えを持っている」と「学習意欲」は、学年・時期を追うごとに互いの関連を強めていく傾向があった。この結果は、学ぶことに対する「自分なりの意味付け」を生徒自身の中で深めていくことが、具体的な学習行動（家庭学習）を喚起する可能性を示唆するものと考えられる。

「学習意欲」（「家での学習に積極的に取り組んでいる」）と比較的強い関連のあった項目

◆ 「自己理解・自己管理能力」

- ▶ 「必要なときには、苦手なことにもがんばって取り組むようにしている」
- ▶ 「やるべきことがわかっているときには、ほかの人から指示される前に取り組むことができる」

◆ 「課題対応能力」

- ▶ 「何かに取り組むときには、計画を立てて取り組むようにしている」

◆ 「キャリアプランニング能力」

- ▶ 「勉強をすることの意味について自分なりの考えを持っている」
- ▶ 「将来の夢や目標に向かって努力している」

5. 「学ぶことについての意識・意味付け」の個別項目と「学習意欲」の関連

また、「学ぶことについての意識・意味付け」「生活の充実度」「意欲・態度」「勤労観・職業観」に関する個別項目と、「学習意欲」（「家での学習を積極的に取り組んでいる」）の相関を求めた（詳細は参考資料付表7-1参照）。その結果、以下の項目が「家での学習に積極的に取り組んでいる」と比較的強い関連があった。

「学習意欲」（「家での学習に積極的に取り組んでいる」）と比較的強い関連のあった項目

◆ 「学ぶことについての意識・意味付け」

- ▶ 「学校でたくさんのことを学びたいと思う／これからもっとたくさんのことを学びたいと思う」
- ▶ 「学校での勉強はふだんの生活を送る上で役に立つと思う」
- ▶ 「学校での勉強は将来の仕事の可能性を広げてくれると思う」
- ▶ 「学校での勉強は将来の生活を豊かにすると思う」

◆ 「意欲・態度」

- ▶ 「授業を熱心に受けている」

上記の「学ぶことについての意識・意味付け」の項目は、質問文の内容を考慮すると、「学校での学習の有用性」を尋ねている質問と読み取ることができる。この結果から、「ふだんの生活・将来の仕事・将来の生活」といった様々な場面において、「学校での学習の有用性」があると思うほど、積極的な学習行動（家庭学習）を取る傾向があると考えられる。

また、上記の結果から「学校でたくさんのことを学びたいと思う／これからもっとたくさんを学びたいと思う」という「学びへの志向性」を有するほど、「家庭学習場面」において積極的に学習を行う可能性が示唆された。

6. まとめと今後の方向性

キャリア教育を通じて育成が期待されている「基礎的・汎用的能力」と「学習意欲」の関係について、各学年段階での「基礎的・汎用的能力」の状態と「学習意欲」（家庭学習行動）の関連を検討した結果、両者の間に関連が見いだせた。

このことは、これまでも「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査」の「学校調査」及び「学級担任調査」による分析結果に基づく、キャリア教育実践と学習意欲の関連に関する報告と整合的な結果である^(注8)。本分析では「生徒調査」からも「基礎的・汎用的能力」の育成と「学習意欲」向上の関連の可能性が示唆された。

今後は、具体的にどのようなキャリア教育実践が基礎的・汎用的能力を育成し、かつ、それらと関連しつつ学習意欲が高まっていくのかという統合的枠組みの観点から検討することが必要である。

- (注1) 国立教育政策研究所 2002『職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(例)』。
- (注2) 中央教育審議会 2011「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」。
- (注3) 中央教育審議会 2008「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」。
- (注4) 国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター2013『キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査 第二次報告書』。
- (注5) 本章では、「基礎的・汎用的能力」の上昇ができるようになることを増やし、その結果、更なる能力の伸びに対して肯定的になるからこそ、学習意欲が向上するという仮定の下、分析を進めている。
- (注6) 図3～図6は全て統計的検定を行っている。その詳細については、参考資料欄を参照のこと。
- (注7) 中央教育審議会 2011「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」。
- (注8) 国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター2013『キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査 第二次報告書』。